

私、
不運なんです!!

一話 私、不運なんです

——私、寿幸子は——会社で『社内一不運な女』と呼ばれている。

元々、私のひいひいおじいちゃんが、祈祷師だかなんだかの一派で、そこで起こった跡目争いに巻き込まれて……呪いをかけられ、この『不運力』を授かった(?)と言われている。だから、寿家には、『不運な人間』がたまに生まれてくるのだとか。……つまり、私の『不運』は筋金入りなのだ。

思えば幼少の頃から、入園・入学、卒業時の集合写真で、隅っここの小さな枠に収まらなかつた事はない。どんなに元気でも、当日になると、発熱、嘔吐、下痢、インフルエンザで欠席……

好きな男の子の前ですっこけて膝小僧をすりむき、その手当てをしてくれた私の親友に、その男の子が一目惚れ……なんて事は、日常茶飯事。いつもちゃんとやってる宿題をたまたま忘れた日に、先生からあてられる事も、しょっちゅうだった。

中学入試は、遅刻しそうになり、焦ったせいで答えを書く欄が一つずつずれて、不合格。高校入試は、会場に向かう途中で事故渋滞に巻き込まれたけれど、ギリギリセーフで滑り込んだ。かと

思つたら試験の途中でお腹が痛くなり、退席……不合格。そして、第一志望の大学入試は……やめよう。不毛な話だ。

第二志望の短大に進んだ後の就職も、難難難難を極め……数えきれないほどの会社に落ちた。不運体質の上に、おつちよこちよいな性格も兼ね備えている私は、緊張するとドジを踏んでしまう。就職活動でも、その能力を遺憾なく発揮し、何度も面接官の目を丸くさせた。

なんとか今のKM株式会社に入社できたのは、おじいちゃんの知り合いの知り合いが、KM社の誰かと知り合いだった、とかいうコネ(?)とも言いえないような御縁があったから。

KM社は元々建築会社だったけれど、今では市街計画や百貨店改築等のコンセプトを提案する、中堅の総合建築コンサルティング企業だ。総務部や人事部といったスタッフ部門も充実してるから、そういう目立たない部署で縁の下力持ちとして役に立ちたいと希望を出したのに……新人研修後に配属されたのは、男性社員の憧れ+美人で仕事がばりばりできる女性社員が揃ってる、秘書室だった。挨拶の時、先輩秘書のおねーさま方の顔には『どうして、こんな子が秘書室につ!』って書いてあったよね……はあ。

(配属先まで、不運……)

とはいえ、役員の皆さんが気さくなのは幸運だった。小柄な私は『娘か孫のようだ』と古参の役員さん達に館をもらつたりして、可愛がつてもらっている。そんな役員さん達のためにも、会社に貢献できるように一生懸命頑張ろう。そう思ってるのに、やっぱり不運属性が発現し、ここぞという場面で誰かにぶつかつて書類を撒き散らしたり……派手にやらかしてしまう。

(そう……特に……)

——鋭い目付きの鉄仮面を思い出し、私は溜息をついた。あの人の前だと酷いんだよね、ドジが。苦手意識があるからか、自意識過剰なだけなのか……いつも睨まれている気が……する。最近は、なにかドジを踏むたびに、ぽかっと小突かれるようにまでなってきた。そんな事する役員は彼しかない。なんなんだろう、あの人は。

(きつと、相性が悪いんだよね……うん)

鉄仮面の攻撃にもめげずに七年間、頑張つてなんとかここまで来たけれど……はあ。

明日は、一番仲が良い同期の女の子の結婚式。多分寿退職してしまう。これで何人目だろう……当然ながら(?)私に彼氏はいない。私の『不運』は、恋愛関係だとほぼ百パーセントの割合合いで発動する。いい雰囲気になつても、絶対に邪魔が入つてだめになるのだ。反対に、私の親しい友人は恋が成就する割合が高く……「幸子つて幸運のマスコットかも!」と言われた事もあつたなあ。

「はあ……」

一人暮らしのアパートに、溜息だけが響く。私は気を取り直してクローゼットを開き、薄いクリーム色のワンピースを手を取つた。

「これ着るの、何回目かなあ……」

ついでに、あと何回着るのかな。それで一体……

「……いつ、自分の結婚式ができるのかなあ」

好きな人もいない状態からじゃあ……まだまだだよねえ。

私はまた、深い溜息をついた。

——自分の筋金入りの『不運』が、とんでもない悲劇を引き寄せようとしては……この時
まるで気が付いていなかった。

二話 やつぱり、不運かもしれない

白いチャペル。色とりどりの薔薇の花がいっぱい飾られた、有名ホテルの披露宴会場。美男美女のカップルに、舞い散る紙吹雪。本当に、結婚情報誌のCMのワンシーンに出てきそうな光景だった。

「美恵子……おめ、でどよう」

ぐしぐしと涙を拭きながら、なんとか祝福の言葉を贈った私に、白のウェディングドレスを身にまとった美恵子が困ったような笑顔を見せた。

「もう、幸子ったら……赤鼻のトナカイ状態になってるわよ」

「ぞ、そんな事……言われて、も」

同じ秘書室所属の村越美恵子。秘書にふさわしくない、と私に対して眉を顰める先輩秘書のおねーさまが多い中、「同期だから仲良くしてね？」と笑って言ってくれた彼女。大事な会議の資料を運ぶ途中で、『不運』を発動して書類を廊下に撒き散らした時、すぐに拾うのを手伝ってくれたのも彼女だった。先輩秘書から目をつけられる事が多い私を、いつも庇ってくれていた。

本当に、今日の彼女は綺麗で、お姫様みたいで。今までの苦労を知っているだけに、嬉しくて……そしてちょっと淋しくて、涙が止まらなかった。

「寿さんのおかげだよ。いろいろ美恵子の相談に乗ってくれて……ありがとう」

私は涙目のまま、美恵子の隣に立つ、背の高い男性を見上げた。美人の美恵子と並んでも遜色ない、白の婚装束を身にまとった、麗しの王子様。

「専務……」

——鳳裕貴。我が社の社長の二番目の息子で、専務。彼が美恵子に目を留めたのは、先の書類を拾い集める美恵子を、たまたま通りかかった専務が見たのがきっかけだった、と聞いている。

美形で人当たりがよく、仕事のできる社長令息。そりゃあモテないわけがない。私だって、ちよつと憧れてたところもあるし。だから、美恵子に対する女子社員からのバッシングは酷かった。

——ぼろぼろにされた靴、落書きされたロッカー。罵詈雑言のメール。美恵子が会社で泣きそうになっているところを何度も見た。

どんどん顔色が悪くなっていく美恵子を、なんとか元氣付けようとしたけれど、あまり上手くい

かず……おまけに、そんな時に限って私の『不運』が発動してしまった。

次の会議に提出する資料を完成させた直後に落雷に見舞われ、なんの因果かデータが消えてしまったのだ。しかも他の人のパソコンは、まったくの無傷だったらしい。

美恵子が手伝ってくれて、二人で残業して資料を作っていたら……なんとその時に、美恵子に嫌がらせていた犯人が机に悪戯しようとしているところに出くわした。当時専務の専属秘書だった加藤さんが犯人だったなんて、思ってもみなかった。

『あなたなんか、なにもできないくせに！ 私はずっとずっと専務を支えてきたのよ！ なのに、あなたなんか……っ！』

そう言っつて、美恵子に飛びかかろうとした加藤さん。それを止めるべく、二人の間に割って入った私は、勢い余って加藤さんにぶつかり……そのまま加藤さんを巻き込んで、思いっきり派手にすっ転んでしまった。

その時に加藤さんが足首を酷く捻挫して数日休む羽目になって、そのまま会社に戻る事なく退職。その間に彼女がしていた、美恵子への数々の嫌がらせが公になった。

主犯格だった加藤さんがいなくなったせいか、他の嫌がらせも下火になり、美恵子の顔に笑みが戻った。

専務には「美恵子を守ってくれてありがとう」と感謝されたけど、正直複雑な思いだった。私の『不運』が役立つたって……

「美恵子からよく聞かされたよ。辛い時、寿さんにとっても励まされたって。それがなかったら、俺

の事も諦めていたかもしれないって……本当にありがとう」

そこまで言われると、なんだか恥ずかしいけれど……幸せそうな二人の姿に、私も思わず笑みがこぼれた。

「美恵子の事、よろしくお願いします」

ぺこり、と頭を下げた私に、専務は「ああ」と答え……その後、なにかを思い出したらしく、ぼん、と手を叩いた。

「そうだ、寿さん。また改めて話があると思うけれど」

「はい？」

私は優しい笑みを浮かべた専務を見上げた。専務はにっこりと笑いながら、大きな爆弾を一つ、私の頭上に投下した。

「兄貴が君を専属秘書に欲しいって。だから、そのうち人事の話がくると思うよ？」

「……はあっ!?」

私の感動の涙は、どこかにすっ飛んだ。ぶわっとならに浮かぶ、鉄仮面。ああ、兄貴って……あの、兄貴ですかっ!? もう一人、どこかに生き別れの兄貴がいるなんて事はないんですか、専務っ!?

「え、あの、私、そんな……」

戸惑いを隠せない私の背後から……地獄へと招くような、低い声が聞こえてきた。

「よもや断ろうなどと考えてる訳ではないよな？ ……寿」

(ひいひいっ！)

顔を引き攣らせ、冷や汗をかきながら、そっと後ろを振り返ると、そこには……

「ふ、副社長……」

黒の礼服をびしっと着こなし、端整な顔に、それはそれは邪悪な笑みを浮かべた、長身の男性が立っていた。

ああ、親友の結婚式にまで、私の『不運』属性は健在なんだろうか……

(恨むわよおおお、ひいひいおじいちゃんっ！)

心の中で、『呪い』の元凶である高祖父に当たってみたものの……とつくの昔にご昇天された人に言っても仕方がない事で。

私は、はああと重い溜息をついて、鋭い目付きの鉄仮面に向き直った。

——鳳貴史副社長、確か今年で三十四歳。社長の長男で専務の兄、だ。

いつも笑みを絶やさないと専務と違って、副社長は無表情がデフォルト。美形の無表情って、能面みたいで非常に怖い。しかも鋭い目で、事あるごとに睨みつけられている私としては……是非とも

関わり合いになりたくない相手、である。

(絶対、大口開けて笑ったら口元からひびが入って、びきびき顔が割れるに決まってるわ、この人！)

私は、ほほほと引き攣った愛想笑いをしながら、無言の圧力をかけてくる副社長に言った。

「わ、私のような若輩者が副社長の専属秘書など、恐れ多くて。秘書室には他に、優秀で適任な人材がおりますから……」

「——決定事項だ。来週から引き継ぎに入る。準備しておけ」

うぐ。ぼっさり切り捨てられたっ。二の句を継げない私をちら、と見下ろした後、副社長は専務の方を見た。その顔に笑みらしきものが見えて、私は目が点になる。

「良かったな、裕貴。美恵子さん、裕貴をよろしくお願いします」

あ、美恵子が頬を染めてる。専務はちよつとむっとしてる。

「はい……こちらこそ、よろしく願います」

副社長、こんな表情もできるんだ……とぼんやり思っていた私の頬が、突然うにと引つ張られた。

「痛っ！」

なにするのよ、いきなりっ！ 右のほつぺたを押さえ、私は涙目で副社長を睨む。副社長の顔は、また無表情に戻っていた。

「お前、今……失礼な事を考えていただろう」

「そ、そんな事……っ」

なに言ってるの、いきなり人の頬つねる方が失礼じゃないっ!! そんな、私の心の叫びを察知したのか、副社長の右眉が上がった。

「お前がぼーっとしてる時に、口で言っても始まらない」

く、悔しい……っ! けれど、当たっているだけに反論できないっ……!!

うぐうぐと唸り声を上げる私に、にんまりと極悪な笑みを浮かべた副社長が言った。

「楽しみにしてるぞ? お前の『不運』とやらを」

——ああ、やっぱり、私は『不運』なのかもしれない。

副社長の面白がるような視線に、私はまたもや深い溜息をついた。

三話 そもそも、始まりから

今にして思えば、副社長とは最初の出会いからして最悪だった。

——やっとこぎつけた就職最終面接の日。私は会社の一階玄関ロビーのど真ん中で、カエルのように床にのびていた。

早めに乗った電車の中。隣の人が青い顔をして、ふらふらしているのに気付いた。慌てて支えて、

駅員さんに知らせ……それで電車が停止して遅れて。駅からバスに乗ろうとしたけれど、乗ったバスに不具合があったとかで途中で下ろされた。タクシーを捕まえたけど、交通事故で渋滞。仕方ないからその場で降り、残り三〇〇メートルほどを必死で走って、なんとか時間ぎりぎりにロビーに滑り込んだところで、派手にすっ転んだ。

「うう……痛た……」

四つん這いの状態でふと前を見ると、ぴかぴかの高そうな革靴が。そのまま視線を上げていくと……いつまで経っても足!? 遥か上の方から、低い声が聞こえた。

「面接に来たのか?」

あ。郵送されてきた書類が散らばったままだった。

「す、すみませんっ!!」

床に散らばった封筒やポーチを肩掛け鞆に入れ、勢いよく立ち上がった……

「んきやっ!」

今度は踵がずるりと滑って、ひっくり返りそうに。そんな私の腰を、がしっと大きな手が掴んだ。見上げると、無表情な美形がじっと見下ろしていた。その視線に、どくん、と心臓が鳴る。

「ごめんなさいっ!」

離れようと身を引いた私の足首に、ずきつと衝撃が走った。

「……っ!」

ぐらりと揺れた身体がまた、力強い腕に捕らわれる。すっと目を細めた男性は、黙ったまま私

の右足を——パンストが破けて、膝が丸出しになっている足を見た。

「えっ!？」

次の瞬間、急に視界が高くなった。床が……いつもより、ずっと遠いつ!

「あああああ、あのっ!？」

男性が、ひよい、と私を左肩に担いでいた。お姫様抱っこではない。いうなれば、米俵だ。ああ、周りの人達が何事かと集まりだした。視線が痛いっ……!

「その足、医務室で診てもらえ。歩きにくいだろう」

私を担いだまま平然と歩き始めた男性の背中をぼこ叩きながら、私は焦って叫ぶ。

「で、でもっ、面接の時間がっ……!」

びたり、と足を止めた男性は、上着のポケットからスマホを取り出した。

「……ああ、俺だ。今日の面接だが……」

スマホを耳から離し、男性が私に顔を向ける。男性の肩と背中に手を置いて顔を上げた私は……近距離で見ると迫力な美形に、息を呑んだ。頬が熱くなる。

「お前、名前は?」

「こ、寿幸子、です……」

——一瞬、男性が固まった……気がした。

「寿……?」

「は、はい……」

しばらく沈黙した後、男性はまたスマホを耳にあてる。

「今日これから、寿幸子という学生の面接予定が入っているだろう。怪我をしているようだから医務室に連れていく。面接の時間を遅らせておいてくれ」

「え」

私が目を丸くしていると、通話を終えた男性はスマホをまたポケットに入れ、ふたたび歩き始めた。

「あ、ありがとうございます」

「……」

周りが、ざわめいている。社員と思しき人達の、驚きの表情を見るのが恥ずかしくて、私は広い背中に顔を伏せた。そして、そのまま大人しく俵となつて担がれていたのだった。

「……え」

面接官が居並ぶ会議室で、私は目が点になった。

「寿幸子。短大卒の二十歳。……高校卒かと思っていた」

真正面に座り、じーつと書類を見ているその人は……医務室に私を運んだ後、さっさとその場を立ち去った彼だった。

「……専務、彼女がそうですか?」

彼の隣に座った、年配の男性が尋ねる。彼は、ああ、と答えて顔を上げ、真っ直ぐに私を見た。

——澄んだ漆黒の瞳。すつと鼻筋の通った顔は、やつぱりとても綺麗だった。

「KM株式会社専務、鳳貴史だ。……寿」

名前を呼ばれて、思わずびくつと身体が震える。そんな私に、専務はどこか面白がるような視線を向けてきた。そうそう、この時まで副社長は専務だったんだ。

「……で？ 何故さつきロビーの床に這いつくばっていたのか、ここで説明しろ」

朝、家を出てからの不運の数々を正直に話した私を見る面接官の方々の表情は、怪しむものばかりだった。……約一名を除いては。

「判った。で、志望動機だが……」

専務があまりにあつさり話を進めたので、逆に焦ってしまった。

「あ、あの……私の話、信じるんですか？ こんな突拍子もない……」

じろつと睨まれて、私は首を竦めた。ううう、へびに睨まれたカエルの気持ちか判る……つ。

「嘘をつくなら、もう少しまともな話をするだろう。お前の様子もぼろぼろだったしな。作り話をする余裕などなさそうに見えたが」

「は、い……」

専務がそう言うと、周りの面接官も納得したような表情を浮かべた。助けられたのか、そうでないのか、よく判らない……

——その後は、ごくごく普通に面接が進み、私は「ありがとうございました」とお辞儀をして会

議室を出るまで、なんとか冷静さを保つ事に成功した。

でも、外に出た途端……力が抜けて、溜息が出た。

ああ、今回もだめなんだろうなあ。よりによってロビーでずつこけて、会社の専務に担がれるなんて……鈍くさくて使えそうにない奴って思われたよね……

私は肩を落とし、湿布を貼った足を引きずりながら、KM社を後にした。

——しかし数日後に届いたのは、採用通知だった。信じられなくて頬をつねったけれど、やつぱり痛かったので本物だと理解した。

私は実家である寿堂に戻り、採用通知を黒塗りの仏壇に供えて報告した。ちなみに寿堂は、私の祖父が営む和菓子屋である。

（お父さん、おばあちゃん……無事就職できました。見守っていてくれて、ありがとう）

手を合わせて拜んでいると、私の横に藍色の作務衣を着たおじいちゃんが座った。おじいちゃんが右手に持っている赤い小皿の上には、見た事のない和菓子が載っている。繊細な細工の練り切り……

「あ、もしかして新作？」

「……ああ。幸一とあれにも食べて欲しいと思ってな」

私が横にずれると、おじいちゃんは座布団に座った。小皿をお供えして鈴を一回鳴らし、白髪頭を下げて手を合わせる。おじいちゃんはいつも、新作の和菓子ができるとお供えしてるよね。この

練り切りも、そのうち寿堂のショーケースに並ぶんだろうな。

「良かったな、幸子。勤め先がやっと決まって、ほっとしただろう」

おじいちゃんが私の方を向いて微笑んだ。私は「うん」とうなずきつつも、首を傾げた。

「でも……なんでもか良く判らないの。役員さんの前で、思いつ切り転んじやったし……」

「そりゃあ、わしの可愛い孫娘の魅力に気が付いたからに決まってるだろうが。お前を就職させるんだからな、その会社には感謝してもらいたいぐらいだぞ？」

「いや、それは身びいきってんで……」

こんなドジな人間、厄介者扱いされてもおかしくないんだけど。私がそう言うのと、からからからとおじいちゃんが高笑いをした。

「そのうち、嫌でも判る。あそこでお前を必要としている奴がいる、って事がな」

「そう……かな……」

くしゃくしゃと私の髪をかき回したおじいちゃんに、私もふふつと笑顔を向けた。

——で、入社してみたら、まさかの秘書室配属だった、と。

秘書室って、いわゆる女性のエリート、社内の高嶺の花が揃ってる部署じゃないの!? そこに、ちんちくりんな私が紛れ込んでもいいの!? 辞令をもらった時の衝撃は、七年経った今でも忘れられない。

先輩秘書の方々の目は、当然のごとく冷たかった。でも、そんな中で唯一、私にふわつと微笑ん

でくれた女性がいた。

『……私、村越美恵子。同期になるのね、よろしく』

優しい笑顔。すらりと背が高く、モデルみたいな美人。同期だけど、先輩みたいに感じた。

『私、寿幸子。こちらこそ、よろしく!』

私もにっこり笑って、美恵子の手をしっかりと握った。

* * *

「うーん……もぐもぐ……はあ」

竹の菓子切りで驚色の練り切りを切り、口に運ぶ。ほんのりとした甘さが、口の中に広がった。

さすが、おじいちゃんの和菓子。心が和むなあ……

「なに唸ってるんだよ、姉貴」

過去の回想を遮る声に、私は顔を上げる。ことん、と目の前のこたつテーブルに、薄緑色の湯呑みが置かれた。緑茶のいい香りが鼻をくすぐる。

「ありがとう、幸人」

紺色チェック柄のパジャマを着た幸人が、私の前にどかっと座り、手に持っていた紺色のマグカップに口をつけた。私も湯呑みを両手で持ち、温かいお茶を一口飲む。お茶独特の柔らかな苦みが和菓子の甘みと調和して、なんとも言えない美味しさだ。

「美味しい」

幸人って、本当よく気が利くわよねえ……私は、まじまじと目の前の弟を見た。幸人は二歳年下で、身長は百八十二……私より三十センチ高い。すつと鼻筋が通った和風イケメンだ。一緒に歩いていても、私が年上に見られる事は、ほぼ百パーセントない。姉の威厳はどこ行つた。

「で？ なにがあつたんだよ？」

私が目を丸くすると、はあ、と幸人が溜息をついた。

「姉貴が実家に戻ってくる時つて大抵、なんかドジ踏んだか、悩んでる時だろ？ さつきから、こたつに潜つて、うんうん唸つてるしさ。ほら、さつきと話せよ」

「……うう」

(バレてる……)

——落ち込んでる時には、おじいちゃんの和菓子を食べる。それが一番、元気が出る方法。だから、嫌な事があつた時やドジした後は、ここ寿堂に戻る事が多い。渋めのお茶を飲みながら、優しい甘さの和菓子に舌鼓を打つ。それだけで、また明日も頑張ろうつて思えるから。

隠そうとしても、いっつも幸人にはバレるのよねえ……悩みがあるつて。私も溜息をつき、幸人に美恵子の結婚式で聞いた話をした。

「でね、来週から……副社長付きになりそうで……ううう」

ぐてつと、こたつテーブルに頭を載せた私に、幸人が眉を顰めて言った。

「その副社長つて、どんな奴？」

「長身美形な鉄仮面」

きつぱり言い切つた私に、「なんだ、それ」と幸人が突つ込んだ。

「だって……私が失敗してるところに、必ずと言つていいほど居合わせるのよ!? そのたびに睨まれて……っ」

思わずぐつと拳に力が入る。そりゃ、あちこちでぶつかつたり、転んだりしてるけど！ でも、幸人以上に長身な副社長に見下ろされる、ちんくしゃな私の気持ちにもなつて欲しい。威圧感、ハンプじゃないんだから！

「仕事ができて、社長の息子だからモテるし……秘書室で総スカンくらいそう……」

はああ、と溜息をつく私の頭を、幸人がぼんぼん、と軽く叩いた。

「きつと大丈夫だろ。ああ、今度新作作るからさ、また食いに戻つてこいよ。姉貴に食べて欲しいから」

成績優秀で東大にだつて行ける、と言われてた幸人は、高校卒業後あっさりとおじいちゃんの弟子になり、和菓子職人の道に入った。「元々寿堂を継ぐ予定なんだから、早い方がいいだろ」つて言つて。もつたないって私は言つたけど、幸人は「やりたい事やつてるから」と意に介さずだつた。

「うん……ありがと、幸人」

幸人の方が、お兄ちゃんみたいだよね……小さい頃は、すごく可愛くて女の子みたいだつたのに。

「私のスカート穿いたら、すごい似合って『寿堂に美少女がキター』って評判になった幸人が、大きくなったねえ……」

私らしみじみ言うのと、幸人の頬骨あたりがぼつと赤くなった。

「……っ、無理矢理着せておいてなに言ってるんだよ!? そんな黒歴史は記憶から消せっ!」

「えーっ、可愛かったのに! ほら、おかーさんだつて褒めてたじゃない。『シンデレラみたいね、幸人』って」

「あの人の感性は人と違うだろうがっ!!」

そんなに大声で叫ばなくても。今だつて女装したら、きっと私より美人だよ、幸人。でかいけど。……そう言えば、おかーさん、どうしてるかなあ……最近、顔見えないし」

私と全然似てないおかーさんは、一言では言い表せない人物だ。お父さん亡き後、アメリカ人と再婚し、そのまま世界中を飛び回っている。今どこにいるのかさえ、不明だ。

すると幸人が、ぼそつとつぶやく。

「昨日、ジャックからメール来てた。二人でどつかの奥地にいるらしいぞ」

「……なんかまた、怪しそうな……」

余計なトラブル引き起こすからなあ、おかーさんは。まあ、頼れる旦那さんのジャックと一緒に安心だけど。それなら当然日本には帰ってこないかな。

私はふと仏壇の方に顔を向けた。

「……幸人って、お父さんに似てきたよね」

写真の中で笑うお父さんの顔は、目の前の弟に良く似てて。幸人の方が、お父さんの本当の子供みたい。

すると、幸人がすつと目を細めた。

「なんだよ、突然。そりゃ伯父と甥の関係なんだから、似るだろ多少は」

お父さんは優しい声と大きな手の持ち主で、いつも笑顔で見守ってくれていた。私が小学校に上がる前に病気で亡くなって……すごく悲しくて。涙も出なくなった私の前に現れたのが、幸人だった。

将来の寿堂の後継者になって、従弟——三人兄弟の末っ子だった幸人が、私の『弟』になってくれた。お父さんの弟である孝造叔父さんが、一人っ子だった私の事を心配してそうしてくれたんだって知ったのは、ずいぶん後の事だったけれど。

「あの時、幸人が弟になってくれて……とても嬉しかったよ。ありがと、幸人」

私がそう言うのと、一瞬、幸人の目が光った気がした。

「……ほら、さっさと飲めよ。明日も会社なんだから?」

「……うん」

私は弟に、にっこりと笑いかけ、また湯呑みに口をつけた。

「聞いたわよ、異動の話。一体どういう事、寿さん!」

「……私にも判りません。副社長にお聞き下さい」

朝っぱらから目を吊り上げた秘書室の面々に迫られて、私はげんなりしながら答えた。机の上で書類の整理をしている手は止めなかつたけど。

「んまつ、一番できそこないの秘書のくせに、生意気なっ!!」

私は一番いきり立っている二年先輩の佐々木真由香に目を向けた。軽いウェーブのかかった黒髪に、つんとした表情。いつ見てもペルシャ猫を思い出すような美人だ。確か、あの加藤さんと同期で……なにかと競い合ってた仲、だと聞いている。

「突然言われたので本当に、私はなにも知らないんです。……ですから、詳しくは副社長に」

——と言った瞬間、佐々木さんの手が動いた。ぼしっという音と共に、書類があたりに散る。

「せいぜい媚でも売って、恥をかくがいいわ。どうせ副社長の気まぐれでしょうから……『社内一不運な女』が、どんなものだから試したいんだわ、きつと。『社内一強運の男』つて有名な副社長の事だから」

「……」

『強運の男』つて通り名も、イタイわよねえ……私は心の中で溜息をつき、床に落ちた書類を拾い始めた。

「まあまあ、佐々木さん。どうせ、この子の事だから、なにかやらかして即お役御免になるわよ」

……はい、それを切に願ってますが。

「そうよ……副社長の専属秘書に一番ふさわしいのは、主任である佐々木さんですもの」

秘書室所属の一般秘書が、各部署の部長や専属秘書の手伝いを持ち回りで行っているのに対し、専属秘書は特定の役員直属の秘書だ。役員側から能力を見込まれて引き立てられる事が多く、秘書の中でもエリート扱いされている。だから、みそっかすの私を取り立てられた……となったら、皆様のプライドは傷付くわよねえ……

「えっと……あと一枚……」

入り口付近まで飛ばされた書類を拾っていた私の視界に、ぴかぴかに磨かれた黒の革靴が入ってきた。

「なに、床に這いつくばってるんだ? 寿」

頭の上から落ちてきた呆れたような声に、私は顔を上げた。

「は、い?」

じつとこちらを見下ろす……鋭い視線。慌てて立ち上がるうとして、右のヒールがずると滑った。

「きゃ……!」

尻餅しりもちをつきそうになった私の腰に、がしつと力強い腕が回された。そのままぐいつと身体を引き寄せられて……副社長の広い胸に、もたれかかる格好になる!?

「相変わらずだな、お前は。もつと足元を確認しろ」

「ははははは、はいっ!」

はーなーしーてーっ!! 胸に片手を当てて、距離を取ろうとしても……何故か放してくれない。

スーツ越しに温もりを感じ、いたたまれない気持ちになる。秘書の皆さまから、殺気ざつきがめらめらと立ち上っているのを感じ、背筋がぞぞつと寒くなった。

「……失礼ですが、副社長。寿さんが副社長の専属秘書になるというお話は……本当でしようか?」
一歩前に出て、にっこりと微笑む佐々木さんに副社長が向き直る。ようやく解放された私は、一、二歩後ろに下がって距離を置いた。

「ああ。さっそく今日から副社長室に来てもらう。秘書室の君達には、迷惑をかける事になるが、こちらにも急ぎでね」

ひくり、と佐々木さんの口元が引き攣くわった。だから言ったじゃない、私の意思じゃないって。こほん、と咳せき払いをした佐々木さんが、改めて副社長を問い質たす。

「その……本当に、寿さんで間違いございませんの? 少々言いづらいのですが……彼女の能力では、専属秘書など……」

佐々木さんはわざとらしく、私に憐あつれむような視線を送ってくる。ちょっとそれ、うっとうしいんですが。私はふう、と溜息をつき、自分の席に戻ろうとした。

——がし。

「へ?」

なんですか、この左腕をがっちり掴つかんでいる手は!? 思わず振り払おうとした瞬間、ぐいつと引っ張られた。

「あ、あの!?」

どうして、副社長の右隣にいるんですか、私!? しかもホールドされた左手が痛いんですけど!? 体格差あるんですから、力加減して下さいよっ!

「……寿、という名の秘書が他にいるのか?」

副社長の冷たく低い声が秘書室に響いた。佐々木さんは一瞬言葉に詰まったが、持ち直して答える。

「いいえ、寿さんは一人しか……」

「なら、こいつだ。間違いないから、さっさと準備させるように。ああ、それから」

口元だけ微笑んだ副社長のオーラが……黒かった。

「こいつはもう、俺の管理下にある。余計な手出しはするな」

びぎ、と秘書室全体に、ひびが入った音がした。

「て、手出しだなんて、そんな……ほほほ」

青い顔で誤魔化ごまかす佐々木さんをじろりと睨にらんだ副社長が、そのまま私を睨にらみつける。

「さっさと支度したくしろ。三十分後に副社長室に来い。鹿波かみなみに連絡してある」

「……はい、判りました」

しぶしぶ返事をする、さらに副社長のオーラが黒さを増した。

「……逃げたら承知しないからな。判ったか？」

あまりの気迫に圧倒され、思わずこくこくと首を縦に振ってしまった私だった。

恐る恐る訪れた副社長室隣の専属秘書室では、にこにこ感じのよい五十代後半ぐらいの女性が私を出迎えてくれた。ゆるいパーマに丸眼鏡をかけた姿は、まるでアメリカのカントリードラマに出てくる、ふくよかで人のいいおばさんみただった。

「あら、あなたが寿さんね。私、副社長専属秘書の鹿波雅子まさこです。……まあまあ、噂通り可愛らしいお嬢さんだこと！」

「こ、寿幸子です。よろしくお願いします」

う、噂ってなんですか!? しかも可愛らしいって!? ……聞き慣れないセリフに、頬が熱くなるのを感じる。私と同じくらい小柄な鹿波さんは、ふふふと優しく笑った。

「副社長、とても心配していらしたのよ? ほら、突然の引き抜きでここへ配属になったでしょう? 秘書室でなにか言われたりしてないかって」

「……え」

私は鹿波さんをまじまじと見てしまった。嘘を言っているような感じではない。いや、でも。

(あの副社長が……私の事を心配?)

大体さつきだって、私を思い切り睨にらんでなかったっけ!? あれが心配してる人の態度なのだろうか。いや、とてもそうは思えない。

(きつと鹿波さん、拡大解釈してるのよね……)

確か社長の古くからの知り合いで、副社長や専務を子供の頃から知ってるって聞いた事がある。鹿波さんにとっては、あんな副社長でも子供みたいに可愛く見えてるんだろう、きつと。

紺色のスーツ姿の彼女の背筋はびしっと伸びている。親しみやすくおっとりしたタイプに見えるけれど、鹿波さんは気難しい副社長のフォローを一手に引き受けている、凄腕の秘書だ。

鹿波さんは、にこにこ話を続ける。

「私も、もうじき定年でしょう? だからそろそろ仕事を引き継つがないといけないの。でも……」
はあ、と重い溜息が鹿波さんの口から洩もれた。

「なかなか適材がいなくて。副社長は仕事に厳しいし……自分に色目を使う秘書なんていらんっておっしゃるし。その条件を満たす秘書って、あなたしかいなかったのよ、寿さん」

私は目を丸くした。条件を満たす……って。

「で、でも……その、鹿波さんもご存知の通り、私はよく皆さんにご迷惑をかけて……」

「あら、寿さんが携たづなわった案件って、皆成功してるのよ? それに、あなたは勤務態度も真面目まじめで誠実まことだわ。おまけに……」

くすくす笑う鹿波さんは、とても可愛らしい。

「あの副社長になびかない秘書、ですものね。とても貴重な人材だわ、あなたは」

「は、あ……」
なびくもなびかないも……。いつもいつも、なにかと睨みつけられてるこの状況では、なびきようがないというか。うーんと考え込んだ私を見て、あらあら、と鹿波さんがつぶやく。

「意外と不器用なのね」

「意外もなにも、私の不器用さは有名で……」

きよとんと鹿波さんを見る私に、彼女はふつと噴き出した。

「まあ、いいわ。私が口出しする事でもないしね……では」

鹿波さんの表情が、きりりとした敏腕秘書のものに変わる。

「今から業務内容を説明するわね。荷物はこの机に置いて、こちらに来て頂戴」

「はい！」

私は指示された通りに荷物を置き、メモとペンを取り出して、鹿波さんの傍に行った。

「まず、この副社長の秘書室の説明をするわね」

通常、役員の専用部屋は一つで、秘書と同室になるけど……社長と副社長だけは、秘書専用の部屋があるんだよね。鹿波さんは入り口の右側に二つ並ぶ机を指差した。机の上には、書類を置くB4サイズの赤い箱と黒いノートパソコンが置かれていた。入り口に近い方が、私の席らしい。

「こちらが、私達専属秘書の席ね。机の隣にある棚に、各部署から依頼がきた書類を入れてもらうの」

机の奥には、コートも掛けられるロッカーが二つ。よくある灰色じゃなくて、木目っぽい模様になってる。そういえば、この部屋自体も濃いめの色合いの木目調だよ。高級感溢れてる……

窓際には白いテーブルとモスグリーンの二人掛けのソファが置かれ「こちらで、副社長の仕事が終わるのを待っていたく事もあるのよ」と鹿波さんが説明してくれた。

入り口の左側には小さなカウンターがあって、その上のコーヒーマーカーがこぼこぼいっている。その後ろの壁には、これまた木目調の食器棚とミニキッチン。

「お客様がいらして飲み物を出す時は、カウンターの後ろの食器棚のものを使つてね。副社長はコーヒーマーカーから、コーヒーマーカーは切らさないように。お客様によっては、紅茶や日本茶を望まれる方もいるから、各種茶葉も食器棚に入ってるわ」

「は……」
「……で。秘書機の正面、キッチンコーナー横の壁の中央に、重厚な造りの扉がある。ここが副社長室への扉だよ」

「今、副社長は外出されているけれど、室内を見てもいいと許可頂いてるから」

かちやり、と鹿波さんが金色のドアノブを回した。重そうな扉が、ゆっくりと開く。鹿波さんに続いて、私は初めて副社長室に足を踏み入れた。

「うわ……」
思わず声が洩れた。濃い茶色で重厚感のある部屋。ドアの正面奥にでんと鎮座しているのが、副社長の机だよ。艶やかでどっしりした印象の机に、黒の革張りの椅子。机の上は綺麗に整頓され

ていて、多分処理中と思われる書類も、いくつかに分類されて縦置きの箱に入っていた。

鹿波さんが悪戯いたづらっぽく言う。

「副社長はご自身で整理整頓される方だから、私が机を片づけるという事はほとんどないわ。……社長はお仕事中、書類の山が次々できて、よく雪崩なだれを起こしていたけれどね」

「そうか、鹿波さんは、元々社長秘書だっけ。副社長が専務から昇進した時に、副社長付きになったんだった。」

机の後ろの壁に、備え付けっぽいクローゼットとガラス戸付きの本棚。本棚には、ファイルがぎっしりと並んでいた。部屋の中央の応接セットも、黒の革張りソファで高級そうだなあ……さすが副社長室。入り口の右手にある窓からは、高層ビル群が見える。グリーン地に茶色の模様のカートンも、高級感が漂ただよう。窓際に置かれた、幹みきがぐねぐねと編まれたパキラの葉は、濃い緑色で元氣そうだった。

「観葉植物の水やりも、忘れないでね。朝出社したら、副社長室と秘書室を簡単にお掃除するついでにやっているの」

窓の反対側にある、副社長室から直接廊下に出るドアは普段使われてないんだとか。必ず秘書を通してから面会、って事よね。

(……あ)

ふと思いついて、私は鹿波さんに言ってみた。

「あ、あの鹿波さん。その掃除……私にさせていただけませんか？」

「まあ、寿さんが？」

鹿波さんが目を丸くする。私は「ええ」とうなずいた。

「まだまだ業務を私一人でこなすのは難しいと思いますが、お掃除ならできますから！ 秘書室でも掃除係でしたし！」

鹿波さんは私の目をじっと見た後、くすりと笑った。

「そう。それだったら、お願いしようかしら。じゃあ、掃除道具の場所を説明するわ」

「はい！」

(よし！ 頑張ろう！)

私と鹿波さんは、ふたたび副社長専属秘書室へと戻っていった。

鹿波さんによる懇切丁寧な業務説明が一通り終わった後、まだ残っていた業務をこなすために私は秘書室へと逆戻り。針のムシロの上で作業して、やっと帰れる〜と一階玄関ロビーに降りたら……

「あれ？」

帰宅する女子社員がちらちら見てる、背の高い、綿のジャケットにジーンズ姿の男性は――

「幸人？」

呼びかけると、ガラスの自動ドア近くに立っていた幸人が私の方を向いた。ててつと駆け寄る私を、幸人はじっと見ている。弟は……姉の私が言うのもなんだけど、かつこ良かった。足長いよ

ね、こうやって見ると。

「どうしたの？」

「ああ……姉貴が上手くやってるか、ちょっと気になって」

……あ。私が愚痴こぼしたから、気にしてくれてたんだ。私にはつこりと笑って言った。
「ありがと、幸人。うん、大丈夫……なんとかかなりそうだよ」

鹿波さんは親切だったし。副社長は……相変わらず鉄仮面で、じろりと睨まれたけど。でも、どやされる事なく今日は終わったし。

「今日、実家に戻ってこいよ。姉貴の好物、こしらえてやるから」

「え、本当！」

幸人は、お料理が抜群に上手なのだ。絶対に、いいお婿さんになると思う。うわー、なににしよう……と思つてたら、背筋がぶわっと寒くなった。

「……寿？」

私の背後に視線をやった幸人の表情が、さっと硬くなる。恐る恐る振り向くと……トレンチコートを着て、黒いビジネスバッグを持った長身の鉄仮面が、そこにいた。

（うわわわっ！）

眼光鋭いっ！ な、なんか……機嫌悪そう？ 副社長の背後から立ち上るダークオーラに、思わずぶるっと身体が震えた。

「ふ、副社長……お疲れ様です」

どもりながらもお辞儀をした私をじろり、と睨んだ副社長の視線は……そのまま隣の幸人に移った。幸人も目付きが鋭くて……なんかいつもと違う……？

（ななな、なんでこの二人、睨みあってるのーっ！）

……コワイ。長身の美形同士が睨みあってるのって、とつても怖いっ！ ブリザードが吹き荒れるこの状況を打破しようと、私は慌てて言葉を継いだ。

「あ、あの……私の弟です。幸人、こちらは鳳副社長。私の上司よ」

幸人が息を呑み、副社長は一瞬、目を見開いた。

「弟……？」

「鳳……副社長？」

幸人はほんの少し間を置いた後、抑揚のない口調で言った。

「義理の弟の寿幸人です。姉がいつもお世話になっております」

深々とお辞儀した幸人を見る副社長の顔は……なんだか引き攣っているような気がした。私が童顔だから、姉弟に見えないんだ、きっと。

「鳳貴史だ。こちらこそお姉さんには、いつも世話になっている」

会釈した後、副社長が私を見下ろして言った。

「明日から、頼んだぞ。鹿波の手助けをしてやって欲しい」

「はい、判りました。では、お先に失礼致します」

ぺこりともう一度頭を下げ、幸人と一緒に自動ドアをくぐった。背中に、焼けつくような視線を感じながら……

(怖くて、振り返れない……)

きつと、あれだ。振り返ったら、石になるんだ。幸人の左腕をぎゅつと掴んだまま、私は足早にその場を離れた。

「さっきの男が……姉貴が言ってた……」

幸人がぼそつとつぶやく。私は幸人を見上げ、「うん……」とうなずいた。

「仕事ができて、凄い人なんだけど……なんか、苦手なのよね。ずっと睨んでくるし……」

それにしても副社長は、なんであそこにいたんだらう。車通勤しているそうだから、副社長室から地下の駐車場に直行した方が早いのに。ぶつぶつと文句を言っていた私は、幸人の様子がおかしい事に気が付いた。

「……幸人？ どうしたの？」

正面を向いたままの幸人は、険しい表情で、どこか遠い目をしていた。

「あいつ……」

「幸人ってば！」

はっとしたように、幸人が私の方を見た。もう幸人の雰囲気はいつも通りに戻っていて、私はほつと溜息をついた。

「……幸人も疲れてるんじゃないの？ 新作作りで無理してない？」

幸人がふつと微笑み、ぐしゃぐしゃと私の頭をかき回した。「もう！」と抗議すると、幸人はからからと笑って言う。

「俺は大丈夫……ほら、行くぞ」

「う、うん」

急に大股歩きになった幸人にあわせて、小走りの後を追いかけた私は……その時、副社長の視線がずっと私達を追いかけていた事に、気が付かなかった。

五話 同期と、不運と、唇と？

「んーつと……拭き残しは、ないよね？」

翌朝、副社長の机を拭き終わった私は、きよろきよろと辺りを見回した。テーブルと黒の革張りソファも綺麗になったし、床にゴミも落ちてない。パキパキにも水をやったし……後は、ポットのお湯を確認して、モーニングコーヒーの準備かしら。

私は副社長室を出て、秘書室のカウンター奥にあるミニキッチンへと向かう。さつきセットした湯沸かしポットは、もう沸騰済みになっていた。コーヒーターは……戸棚の中だったよね。コーヒーマーカーに水を入れ、コーヒード豆をセットする。電源を入れると、やや耳につく音と共に、

豆が挽かれていく。

ふわんという香りが、秘書室に漂う。うん、いい豆だよね。さすが副社長用……。こぼこぼどリップ音が響く中、少しだけ休憩。ちよつとカウンターにもたれながら、壁掛け時計を見上げる。時刻は八時半。もうそろそろ副社長が来る頃だよね……

入り口の右横の壁にある姿見で、身だしなみを確認した。紺色の上着にタイトスカート、ボウタイ付きの白いブラウス、という絵に描いたような模範的女子社員の姿、だ。髪はくるまるまでは長くないから、内巻きにするとしてみた。これが、私にできる精一杯のオシャレだった。

(佐々木さんみたいな、縦ロールは無理だよねえ……)

すらりとモデルみたいな体形。お嬢様っぽい巻き髪。着ているスーツは、いつつもブランド物。細いヒールのパンプスを履いて颯爽と歩く姿は、秘書室のシンボルになっていた。私には、ああいう気は到底出せない。もつとも、気は求められてないみたいだから、安心だけど……。副社長になびかない秘書、というのが人選の最重要項目だったみたいだし。鏡の中の私と顔を見あわせて、ふう、と溜息をついた。

「指名されたんだから、仕方ないよね……」

——とりあえず、私にできる事をやろう。うん。

朝一番に出社して、副社長室の掃除をするのは結構気持ち良かった。いくら不運体質でここでの仕事に慣れてなくても、まだそれほど大きな失敗はしようがないから役に立てるし。鹿波さんには一人で大丈夫です、と言って、今日はゆつくり出勤してもらおう事にした。

(社長の秘書だった時から、ずっとこの時間に出勤していたなんて凄いよね、鹿波さん……)

一人身でお気楽だから続いたの、って笑いながら言っていたけれど、強い意思がなくては、続けられないと思う。

そんな事を考えていたら、ピーツと音が鳴った。あ、コーヒーができたみたい。ちゃんとできてるか、味見してみようつと。

白いコーヒーカップを戸棚から取り出し、挽きたてのコーヒーがなみなみと入ったガラスのサーバーを外して、深みのある色のコーヒーをカップに注ぐ。

「うわ……いい匂い」

両手でカップを持ち、立ち上る香りを楽しんで鼻から吸い込んでから一口飲んでみる。……嫌な苦みもないし、酸味も少なめ。コクがあつて、まろやかだ。甘めにして飲んだら美味しそう。今度生クリームを載せて、ウインナコーヒーにしてみようかな……

「……おはよう」

「ふっ!!」

私は、げほげほと咳き込んだ。こ、こぼさずに済んだ……動揺しながらもなんとかカウンターのカップを置き、涙目で振り返ると……うげ。

——本日も、ホワイトグレーのトレンチコートと、その下にびしっと高級スーツを着た副社長が立っていた。今日みたいな濃いめのブラウンっぽいスーツも似合う。顔がいいって得だなあ……

というか、全然気配を感じなかったんですけど!? 恐ですか、あなたは!?

(あれ? でも……機嫌は良さそう? だよね……)

「お、おはよう……ございます」

少なくとも、昨日みたいな不機嫌さはなさそう。ぺこりと下げていた頭を上げると、副社長は辺りを見回していた。

「……鹿波は? 来てないのか?」

あ、そうか。鹿波さんがこの時間にいないなんて、珍しいよね。

「あ、あの……朝の準備でしたら、私一人で充分ですから……鹿波さんは定時にいらつしやいます」

「……」

しばらくじっと私を見下ろしていた副社長は、くるりと背中を向けた。

「コートを頼む」

「は、はい」

私は背伸びびして、副社長の肩からコートを脱がせる。これ、どこに掛けるんだろう……と思っただら、副社長がぼつりと言った。

「部屋の中にクローゼットがあるから、そこに掛けてくれ。それから……」

カウンター上のカップに、彼の視線が移動した。

「俺にもコーヒーを頼む」

「は、はいっ」

大きなコートを手に持ったまま、私は副社長室に入っていく彼の背中を追いかけた。

(うわ……高そう)

副社長室に備え付けられているクローゼットの中には、礼服を始め何着かスーツが掛かっていた。ネクタイも……有名ブランド物ばかり。ほこりを落としたコートをハンガーに掛け、クローゼットに仕舞う。

「……」

う……背中突き刺さる視線が痛いっ……! 私を射殺す気ですかっ……! クローゼットをばたんと閉めて振り返ると、なにを考えてるのか読めない瞳にぶつかった。

副社長は、応接用のソファアームにすっと座り、茶色の紙袋をテーブルの上に置く。その紙袋に印刷されている王冠のロゴを見て、私はあっと声を上げた。

「……Tarte du bonheur!」

副社長が右眉を上げた。

「知ってるのか」

「当たり前ですっ! 売り切れ必至の人気店ですよ!? このパイやタルト、絶品で……!」
以前、お客さんからの頂き物を、仲良しな同期の小田原くんがおすそ分けしてくれたんだよね。
一度しか食べた事ないけれど……本当に美味しかった! 心の中で涎を垂らしながら、紙袋に釘付

けな私を見て、副社長が苦笑した。

「……ほら」

え。私は目を丸くした。副社長は紙袋を私の方に差し出し出している。

「コーヒー飲みかけだっただろう。これも一緒に食べる」

「えっ!? よ、よろしいんですかっ!?」

びっくりして叫ぶと、副社長の目が優しくなった。うっ……思わず頬が熱くなる。み、見慣れないものを見た……

「このケーキを土産にもらった時、喜んでばくばく食べたんだろ、お前。小田原からそう聞いた」

小田原くん、なに言ってる……と思った私に、副社長が言葉を継いだ。

「初日だからな。これで少し息を抜け」

……気を遣ってくれてたんだ。鹿波さんが言っていた通りだった。ちよつとの間、ぼーっとしてしまったけれど、なんだかくすぐったくて……そして嬉しい。

思わず笑顔になる。

「は、はい！ ありがとうございます！ このご恩は必ず！」

紙袋を受け取った私は、口元を綻ほだまはせたままお礼を言った。副社長が、わずかに目を見張る。

「コーヒー、入れてきますね」

ぺこりとお辞儀じぎをし、軽い足取りで副社長室を出て行く私には……背後の副社長の様子は判らな

かった。

* * *

「えーつと……後は営業部と、企画部に確認に行けばいいわよね」

—— 寿さん。午後からの会議の資料を提出していない部署があるの。もう時間がないから催促さいそくしに行ってくる？

始業して間もなく鹿波さんの依頼を受けて、私はいくつか部署を回っていた。もうできあがっていた部署から預かった資料は、封筒に入れて小脇こわきに抱えている。

営業部の部屋を覗くと……私を見て、にやりと笑った男性がいた。

「よっ、これはこれは副社長専属秘書ぼつてきに抜擢ぼつてきされた、寿サンじゃあないですか？」

「もう……言わないでよね」

ふざけた調子で話しかけてきたのは、さっき副社長の話に出た小田原仁じん。同期だけど四大卒だから、年は二歳年上になる。グレーのスーツ姿の彼も、黙っていればそれなりな男で、同期の出世しゅっせ頭がしらだ。

「午後からの月次会議げつじかいぎの資料、営業部の分が出ていませんか？ ほら、新規プロジェクトの企画説明するんでしょ？ 桐野部長きりのぶちやうは？」

口調を改めてそう言うと、小田原くんは「参ったなあ……」と言いながら、ぼりぼりと人差し指で頬を掻いた。

——古くなった駅前ロータリー付近の再開発。その総合デザインを担う会社を決めるコンペが近く開催されるのだ。久々の大型案件で、社内の皆が期待を寄せている。小田原くんは課長に昇進してすぐ、この案件の担当になった。この仕事をGETできれば、さらなる出世間違いなし！だよ。

「部長は今日急な出張でさ。俺も昨日まで出張行って……まだ資料の最終チェックができてないんだよ。十時半までには用意するからさ、もう少し待ってくれよ？」

もう、と私は小田原くんを睨んだ。デジタル化の進んでいる昨今でも資料は紙！ っていう役員さんが多い。コピーしなくちゃならないし大変なんだけど。

「じゃあ、まとも次第、一部印書して副社長室に届けて下さいね？ それからデータは私宛にメールで送ってね」

「了解」

では、とお辞儀をして立ち去ろうとした私の右腕を、小田原くんの左手が掴んだ。

「ちょっと、こっち来いよ」

ぐいぐいと部屋の方の方に引っ張られる。コピー機や文具入れの棚があるコーナーまでたどり着くと、小田原くんは手を離れた。

「なあ、お前……なんで副社長付きになったんだ？」

小田原くんが真面目な声で言った。私は小田原くんの顔をじっと見つめる。

「え……っと……私にも、よく判らないんだけど……」

首を傾げる私を見て、小田原くんが頭を抱え、呻いた。

「くあーっ、相変わらず超ニブい奴……」

「なによ、超ニブい奴って!! ていうか、その言い方、小田原くんはなにか事情を知ってるの!？」

今度は、はああああ、と深い溜息をついた小田原くんの私を見下ろす目が、なんか……

「小田原くん、なんでそんな憐れむような目で私を見るの……?」

「俺が気の毒に思ってるのは、副社長の方だっ」

「なんでよ。いつも人の事、睨みつけてくるのよ、あの人っ！ 私がドジする場面にことごとく居合わせるしっ！」

……と、そこまで言った私は、先程の恩を思い出した。

「まあ、さつときは洋なしのパイくれて美味しかったけど……」

——白のお皿の上できらきらと輝いていた、洋なしのタルトパイ。黄金色の洋なしの薄切りがパイの上に薔薇を模ったように並べられていた。それらを透明なゼリーが覆っている様は、とても美しくて芸術品のよう。香ばしいパイ生地は分厚くて、しゃくしゃくで、ほっぺたが落ちるかと思った……

「餌付け、かよ。まあ、お前には有効かもな」と呻いて、小田原くんが天を仰いだ。

「……なあ、寿。これは運命の出会いってヤツだぜ、きつと。こんな鈍いお前の相手できるの、副

社長ぐらいなもんだわ」

私は目を丸くした。

「なにそれ。副社長が『社内一強運の男』で、私が『社内一不運な女』だからって事？」
運のプラス量、マイナス量じゃ、差し引き0になるかもしれないけど……でもねえ……

「副社長みたいなハイスベックの人と私なんて、全然釣り合わないって」
きっぱり言い切った私を、生ぬるい目で小田原くんが見た。

「いや、そうかも知れないけど、相手はそう思っていないっていうか……」

小田原くんは手を伸ばして、私の頭をくしゃくしゃした。

「ちよっと、なにするのよっ！」

「まあ……頑張れ」

そう言い残して小田原くんは、席に戻っていった。

「もう……」

私は髪を整えて、営業部を後にした。

「ただ今、戻りました」

副社長室に戻ると、鹿波さんはいなかった。受け取ってきた資料を、会議室に持っていく資料の束たばの上に置く。

「後は、会議室の各席にこの資料を置いて……」

と、午後の段取りを確認していた私の耳に、甲高い叫び声が飛び込んできた。

「……いい加減にしなさい、貴史さん！ いつまでもミカさんを……っ！」

聞いた事のない女の人の声だ。副社長室から？ 私は思わず立ち尽くす。

誰だろう、一体。なんだか、修羅場しゆらばっぽいんだけど……

「……から、……」

副社長の声は、低くてよく聞き取れない。

「……裕貴さんは、……から許しましたけれど、あなたは……なのよ!? それなのに……!!」

「そうよ、貴史さん……」

「……り下さい。業務の邪魔です」

「貴史さん……っ……!!」

呆然ぼうぜんと突っ立っている私の目の前で、バタン！ という派手な音と共に副社長室の扉が開いた。中から出てきたのは……セレブっぽい女性二人組。白地に金や紅色の花が描かれた、高級そうな和服を着た年配の女性と、これまた高そうな黒のワンピースを着た、栗色の髪の毛のモデルみたいな女性だった。髪をアップにまとめ、赤いかんざしを挿した年配の女性の表情は、鬼のように険しい。

あれ、この年配の女性は……どこかで会った事、ある……？

じろり、とこちらに目を向けられ、私は戸惑いながらも深々とお辞儀じぎをした。ワンピースの女性は、私を見て、ちよっと小馬鹿にしたような顔をする。

年配の女性が口を開く。

「あの秘書はいないのね。ついでだから、文句の一つも言ってみようと思つてたのに」
「えっ」

私は息を呑んだ。あの秘書つて……鹿波さんの事？ でも、鹿波さんは文句を言われるような人じゃ……

「母さん」

副社長の冷たい声に、年配の女性の眉が上がる。二人の後ろから出てきた副社長の瞳は……北極の氷みたいな冷たい色をしていた。

（母さん……つて……じゃあ、この人……社長夫人!?）

そうか、美恵子と専務の結婚式で見たんだ。

あの時は上品そうな御両親だなあつて思つただけ……い、印象が全然違うっ！ こんな鬼のような形相をする人とは思わなかった。

「雅子さんの事を悪く言うのは、たとえ貴女でも許さない。……俺達を放置していた貴女よりもずっと、俺と裕貴にとつて大切な存在ですから」

社長夫人は軽蔑したように、鼻で笑つた。

「どうだか。貴方達にいい顔をして、鳳家の財産を一部でももらい受けようつて魂胆でしょうよ」

「あ、あのー！」

思わず声を上げた私に、二組の鋭い視線が突き刺さる。眉を顰める社長夫人に、私は言葉を続けた。

「鹿波さんは、優秀な秘書ですっ！ それはこの会社の社員なら、誰だつて知ってます。副社長のサポートだつて完璧で……それに」

一拍間を置いて、私は言つた。

「とても気が付く、優しい方です。副社長の事だつて、本当に心から案じて……」

昨日一日引き継ぎの話の話を聞いただけでも判つた。鹿波さんがどれだけ、副社長の事を考えているか。心配しているか。だから……こんな風に悪く言われるのを聞くのは嫌だ。

「ですから、どうか誤解しな……」

「貴女、お名前は？」

社長夫人の鋭い言葉が、私の言葉を切り裂いた。私は目を瞬き、ぺこりと頭を下げる。

「わ、私は……昨日付で副社長専属秘書になりました、寿幸子と申します……」

「寿!? 寿ですつて!？」

悲鳴のような声が部屋中に響いた。私を見る目が、みるみるうちに冷たくなつていく。

「まさか、寿堂の……」

うちの事、ご存知なんだ……私は戸惑いながらも答えた。

「……はい。祖父が経営しております」

「……っ！」

社長夫人の瞳の色が憎しみを帯びたものになつていく。口元と刺繍が施されたガマ口ポーチを持つ手がわなわなと震えていた。

「なにを考えてるの、貴史さん！ 貴方、ミカさんを断つたくせに……よりによって、不幸を呼ぶ女を傍に置くなんて！」

「えっ」

私はまた息を呑んだ。この人、私の『不運』属性を知ってるの……？ その後も私の耳に、次々と言葉の矢が突き刺さる。

「ミカさんなら、紺野商事の社長令嬢で、申し分ないのに……」

社長夫人の視線が、ワンピースの女性に移った。ワンピースの女性はうつすらと微笑んで、うなずく。多分、この人がミカさんなんだろう。ミカさんは、縋るような目で副社長を見上げた。副社長の視線は、冷たいままだ。

「そうよ、貴史さん……私、貴方の事ずっと好きだったのよ？ だからもう一度……ね？」

昼ドラ！ 昼ドラだっ！ 目の前で突然始まった恋愛ドラマに、私は固まってしまった。遅しい腕に絡まるミカさんの手を、なにも言わず払いのける副社長。ミカさんの瞳が一瞬凍りつく。その様子を見ていた社長夫人が私をきくと睨んで指差した。

「とにかく、この女の事は認めません！ とつとどクビに……」

黒い影が、私と二人の間に立つたかと思うと……私は肩をぐいつと掴まれ、引っぱられた。副社長に……抱き寄せられてる!?

「貴史さん!？」

「貴史さん!？」

「副社長!？」

同時に私達は叫び声を上げた。副社長は、冷やかな目で母親とミカさんを見下ろし……そして静かすぎる声で社長夫人に告げた。

「貴女の指示は仰がない。こいつは手放しません」

「へっ?」

私は目がまん丸になった。な、なんか、話がおかしくなってますか……？

ミカさんがひゅつと息を呑み、口に手を当てた。社長夫人は顔色がみるみる悪くなり、目はつり上がり、口元は歪んでいった。和服美人が台無し……

「もう誑かされてしまったの、貴史さん!？ この女だつて、金目当てに決まってるでしょうが!!」

「べ、別に私、副社長のお金なんて興味ありませんっ!」

思わず反論した私に、社長夫人とミカさんの鋭い視線がぐさぐさと突き刺さった。私の肩に回った副社長の手、ぐつと力が入る。社長夫人が甲高い声で叫んだ。

「あなたの呪われた血など、鳳家には決して近付けさせません！ 大体、貴史さんにはミカさんのように、もつと家柄の良い……っ!？」

——え……っ。

一瞬、なにが起こったのか理解できなかった。

目の前が急に暗くなったかと思つたら……副社長の息がかかつて。

(……っ!?)

——私は逞しい腕に強く抱き締められたまま……何故か唇を奪われていた。

——今……一体……どうなってるの？

呆然としていた私の呪縛を解いたのは……ほとんど悲鳴のような、社長夫人の金切り声だった。

「たっ、貴史さんっ……!!」

ゆっくりと副社長のぬくもりが離れていく。間近に迫る副社長と視線ががちあった瞬間、心臓がどくと音を立てた。ただただ、目を見開いたまま動けない私の顔を、副社長は広い胸にぎゅっと押し付ける。

「俺の相手は俺が決めます」

「な、なんですって!? まさか、その女とっ!? ゆ、許しませんよっ、よりによって、呪われた女に鳳家の後継ぎを産ませるなんてっ!?」

社長夫人の声は、完全に裏返ってしまっていた。「貴史さん、どうしてしまったのっ!?」と叫ぶ、ミカさんの声も聞こえる。

「……俺がこいつと結婚するのにも、子供を産ませるのにも、貴女の許可は必要ない」

……へ？

顔を胸板に押さえつけられたまま、私は目を瞬いた。

今……なんか……信じられない言葉を、聞いたような？

「貴史さんっ、なんて事を！」

「目を覚まして、貴史さんっ！ こんな女、あなたに相応しくないわっ！」

「え、あ……むぐっ!?!」

誤解を解こうとしたけれど、大きな手で顔を押しさえ付けられて言葉にならなかった。

「お帰り下さい。これ以上、雅子さんやこいつに暴言を吐くようであれば、容赦なく叩き出します。」

ミカ……お前も二度とここへは来るな」

「……っ！」

ミカさんが息を呑む音が聞こえた。それから「お母様っ！」と彼女が悲鳴を上げる。部屋中に、冷たい怒りの気配が充満した。

「……っ、このままで済むと思わない事ね！ 行きましよう、ミカさんっ」

「は、はい」

忙しない足音が聞こえたかと思うと、バタン!! と激しくドアを叩き付けるような音が響く。

しばらくして……ふう、と頭の上に溜息が落ちた。私も自分を拘束する力が緩んだ隙に「ふは」と大きく息を吐く。

「………寿？」

私の頭の中は、真っ白なままだった。

「お前……」

えーと……今、なにが起きたんだろう……

「おい」

社長夫人とミカさんが来て……『呪われた女』と言われて……

「おい、聞いているのか？」

……それで。

……そこまで思考が追いついた私は……

「うっきゃあああああああああああつ!!」

悲鳴を上げ、思い切り副社長を突き飛ばして、後ずさりしたのだった。

「な、な、な……」

かあああつと頬に血が上るのが判る。わわわ、私……っ!

(ふ、副社長と、キ……キキキ、キス……っ!?)

軽く触れた程度ではあるけど。でも、したよね!?

百面相する私の顔を見て、副社長がすつと眉を顰めた。また心臓が不自然に鳴る。

「……寿」

副社長の唇が動くのを見ただけで……もう、耐えられなくなった。私はくると踵を返し、ドアへと一直線に突進する。

「おい、待て」

「ししし、失礼しまつ……!!」

走りながら手を伸ばしてドアノブを掴もうとした瞬間——ドアが向こう側に開いた。

「失礼します。会議の資料を……っつて、おわっ!？」

「きゃあああつ!!」

どかつ、と派手な音と共に、私は頭からなかに突っ込み……そのまま廊下に倒れ込んでしまった。

「……うっ」

「……っ、一体……っつて、寿!？」

へ? と頭を上げると——前髪が乱れた小田原くんの顔が目の前にあった。

「小田原……くん? ……っ!!」

「あ!!」

小田原くんの顔が、真っ赤に染まる。私が小田原くんに圧しかかるような格好になっていて……咄嗟に私を受け止めようとしてくれた(?) 手が……私の左胸を覆ってる!?

「きゃあああああつ!!」

「うわあああああつ!!」

同時に悲鳴を上げた私達は、ぱつと身体を離れた。両手について身体を起こした私は、尻餅をいつている小田原くんと向かい合わせになっ……

「おおお、小田原くんじゃねえだろ! 早く足っ!」

あ。立て膝ひざになった拍子ひょうしにスカートがめくれ上がってるっ！慌びやうてて膝ひざを床とこについてスカートの裾すそを引っ張ひろうとして……はた、と気が付いた。私わたし、右手みぎでなにかを握にぎってる……？

「お、お前まへっ……！」

……ぐしゃぐしゃになった、印刷印刷された紙かみが右手みぎの中なかにあった。

「こ、これっ……プロジェクトの提案資料ていせんしりょう!?」

小田原くんが床とこに落おとした資料しりょう。なんページかを、無意識むいしやくのうちに、ぎゅっと握にぎってしまっていたらしい。表紙ひょうしを含む数ページは、使いものになりそうにない。ダブルクリップで留とどめた部分ぶぶんも、破やぶれかけてる。

「ごごご、ごめんなさいっ！直ただすの、手伝てんていうからっ！」

立ち上がって、深々と頭あたまを下くだげた私わたしに、小田原くんが苦笑くせうした。

「いいって、もう。また印刷印刷するだけだし、こっちこそ、その……悪わるかった」

小田原くんも立ち上がり、残のこりの資料しりょうを拾ひろい集あめた。

「見みせてみる」

ひょい、と横よこから大きな手が伸のびて、私わたしが持もっていたくしゃくしゃの資料しりょうを奪さらい取る。

「え？あ、副社長ふしやちやうっ!?」

数ページに副社長ふしやちやうが目めを通とおし始め……ある箇所か所でぴたり、と視線しせんを止とめた。

「……小田原おだわら。ここの数字すうじ修正しゆしゆしろ」

副社長ふしやちやうが、小田原おだわらくんに資料しりょうの一いヶ所こを指さ差さして見みせた。

「えっ」

小田原くんが資料しりょうを副社長ふしやちやうから受け取り、内容内容を確認かくにんする。

「このプロジェクトは、規模きぼが大きい分ぶん、リスクも高たかくなる。リスクを計算けいさんして、原価げんかに上乗じやうじやうせしる、と事前じきじに言いったはずだろ。原価げんかと提示ていし価格かかくが直ただってない」

「あー」

小田原くんの表情へいしやうが変わり、副社長ふしやちやうに深々とお辞儀じぎをする。

「申し訳わけありませんっ！急いそいでいて、修正しゆしゆし忘れていましたっ！」

「いいから、早く直ただせ。社長用しやちやうの資料しりょうだろう……直ただしたら、秘書ひやくしの机こゝろの上に置おいてくれ」

「は、はい！すぐに直ただしてお持ちします！あ、助たすかったよ、寿こと！さすがは『幸運きんうんのマスコッ
ト』！じゃあ、後あとで！」

「小田原くん」

小田原くんは、資料しりょうを抱かかえて一目散いちもくさんに廊下らうかを走はり去いっていった。目を丸まるくして突つ立たっていた私わたしの両肩りやうかたに……がしっと後ろうしろから、大きな手が載のった。

「逃にげるな、寿こと。話わを聞きけ」

「うっ……」

こ、この体勢ていせいからじゃ……逃にげられない……よね？逃にげたら承知しやうちしないぞ、という無言むげんのオラが、私わたしに襲おそいかかってくる。

「……はっ」

観念した私は……がくつと頭を垂れたのだった。

六話 約束、しました

「……え」

ずるずると引きずられて副社長室に舞戻った私はソファに座らされ、いろいろ尋問されたあげく、信じられないセリフを聞かされていた。

「わ、私が……副社長の、こ、こい、びと……役？」

真正面のソファに座る副社長の眉が上がる。ううっ、眼光が一段と鋭くなってるっ……！

「なにか、問題あるのか？ 好きな奴も、付き合っている奴もない。今、そう言っただろう」

一層目付きが鋭くなった。思わずソファの上で縮こまってしまう。

「そそそ、それは、そう、ですけど……」

おろおろする私を見て、副社長がはあ、と溜息をついた。

「さっき、母とミカが来たのは……縁談のためだ」

「へ」

縁談……って。ミカさんと？ 副社長は右手を額に当て、うつむき加減になっている。

「前々からいろいろ言われていたが……裕貴が結婚した事で、さらに攻撃が激しくなった」

「はあ……」

まあ……そうだよ。弟さんはすでに結婚したし、副社長だっていいお年だし。そういう話が出て、全然おかしくないよね？

「先程の紺野ミカは、母の友人の娘だ。母のお気に入り一人で、事あるごとにミカを引き合いに出してくる」

ミカさん、お母さんと仲良さそうだったよね……結婚した場合、姑とお嫁さんが仲が良いって事だから、いいんじゃないの？ と、ぼんやり思っていたら――

「痛っ！」

ばかりと拳骨が降ってきたっ！ ううう……と頭を押さえる私を放置したまま、副社長は何事もなかったかのように言葉を続ける。

「ああいう女は御免だ。やたらとプライドが高く、ブランド品やら宝石やらを強請るばかりで、どうしようもない」

「……はあ」

でもお金に不自由した事のないお嬢様なんだろうし、副社長のお家だってそうなんだろうし、そこは少しくらい大目に見ても……。内心首を捻りつつ、副社長の言葉を持った。

「特に今は、大きなプロジェクトを控えている。母達に仕事の邪魔をされたくない。そう言っただけ返そうとしたところに、お前がいた」

「……」

「売り言葉に買い言葉を並べていたら……あんなった訳だが」

「それ……ほとんど副社長のせいじゃ……」

「……なにか言ったか？」

副社長の背中から立ち上る黒いオーラが……コワイ。

「イエ、ナンデモアリマセン……」

……不運だ……間違はなく不運だ……

頭を抱える私を見ていた副社長の瞳が、ぎらりと光った。

「母はもう、お前を俺の恋人だと思っただろうな。お前一人で太刀打ちできる相手ではないぞ。見ただろう、あの勢いを……母の攻撃を一人で受け止められるのか？」

「……で、でも……」

私はごくりと唾を呑み込んで、上目遣いに副社長を見た。いつもと同じ無表情。だけど、迫力が……違う？

「私が副社長の恋人なんて言っても、誰も信じません……。冷静になれば、副社長のお母様だって、きつと。だって、私……今まで副社長の連れてた女性と、全然違うじゃないですか」

副社長が綺麗な女性を連れて歩いているのを、何度か会社近くで見かけた事がある。すらつと背が高く、華やかな美人で、スタイルが良くて。皆高そうなブランド服を身にまとった……そう、ミカさんのように。

副社長がはあ、と嫌そうに溜息をついた。

「あれは、母からの刺客だ。さつきも言っただろう……自分の気に入った女と俺を結婚させたがつている、とな。ミカ以外にも、定期的に送り込んでくるって訳だ」

「……え」

「取引のある会社の令嬢やら政治家の娘やらだぞ？ 無下にもできんだろう……だから、食事ぐらいは付き合っているが、正直煩わしい」

「……」

一層強くなった視線が、私を射抜いた。

「お前という恋人がいれば、ミカを始めとする刺客を断る事ができる。お前だって、俺が傍にいれば母から攻撃された時、俺の後ろにすぐ隠れられるだろう」

「ででで、でも！ わざわざお母様に睨まれてる私じゃなくても、他に……」

「ヘタな女に頼んで、本気にされても困るからな。……お前はそんな事ないだろう？ この会社で唯一、俺になびかない秘書、なんだからな」

嫌味っぽいセリフに、思わずうっ、と息が詰まった。副社長の瞳が、私をがんじがらめにしていく。動けない……

「三ヶ月でいい。さつき小田原に直させた資料の大規模プロジェクト……コンペに勝って仕事を軌道に乗せるまでは……母や母の息のかかった女どもに邪魔されたくない」

三ヶ月。

「……その、三ヶ月経ったら……」

副社長がゆっくりとうなずいた。

「お前を専属秘書から外す。もちろんん母にクビにもさせない。それでいいだろう」
三ヶ月だけ。そうしたら、また元に戻る……

(……のよね!?)

「なんだか嫌な予感がする。背中がむずむずするし……でも……こ、断ろうにも、そんな雰囲気じゃ……っ！」

副社長の圧力に負け……結局「いいえ」とは言えなかった。

「そ、その……三ヶ月間、だけでいいんですよね？ フリをするのは」

副社長の目がすつと細くなった。思わず身が竦む。

「そう言ってるだろう。俺の言う事が、信用できないとでも？」

「三ヶ月間、副社長と付き合ってるように見せかければいいんですね？ お母様の前だけですよね？ じゃ、社内では……普通に秘書の仕事をするだけでいいんですよね？」

「ああ」

ああ、やっぱり……私は不運体質だ。そう思いながら、大きな溜息をついた。

「……判りました。三ヶ月だけ……でしたら」

がっくりとうつむいた私は、副社長の次の言葉を危うく聞き逃すところだった。

「なら、今晚空けておけ」

「え？」

顔を上げると……読めない表情をした副社長が、じつと私を見ていた。心臓がどくと音を立てる。うろう、美形に見つめられるのって……心臓が悪いっ！

「食事しながら、今後の相談だ。善は急げというだろう。今晚ディナーに付き合え」

「ふえっ!？」

「ディ、ディナーって!? 思わず自分の着ているスーツに目をやる。量販品の紺色スーツ。副社長のスーツに目をやる。一目でオーダーメイドと判る、高級仕立てスーツ。いやいやいや、落差ありすぎでしょ!？」

「だっ、だめですっ！ わ、私……仕事着ですし、副社長が行きつけのお店なんて、恐れ多くて行けませんっ……!？」

ふるふると首を横に振る私を見た副社長は、眉を顰めた。お前に断る権利などない、みたいな表情してるっ……。やがて副社長は溜息をつき、上着からスマホを取り出した。さらさらっ指を動かして、スマホを耳に当てる。

「……鹿波？ 俺だ。寿に服のレンタルを頼む。今晚食事に連れて行くから……ああ、それは任せる。会議の準備が終わったら、早退しても構わない。頼んだぞ」

あっさりと電話を終えた副社長が、固まったままの私をふたたび見た。

「問題は解決した。後は鹿波に任せただけだから心配ない。俺は会議後も打ち合わせがあるから一緒に会社を出る事はできないが、待ち合わせ場所は後で連絡する」

それだけ言って、副社長はすつとソファから立ち上がった。つられて顔を上げると……呆然と

座ったままの私に、にやりと鉄仮面が笑った。

「初デート、楽しみにしてるぞ?」

「!!!!!!????????????」

は、はっ、初デートおおおっ!? 一気に頬が熱くなる。そんな私を置いて、副社長は軽い足取りで副社長室を出て行った。

「……不運、だ……」

一人残された部屋でつぶやき、がくつと目の前のテーブルに突っ伏した。

七話 美味しゅうございました、のその後で

きらきら光る豪華なシャンデリア。大理石の床の上、通路となる部分にだけふかふかの絨毯が敷かれている。壁には名画が飾られていて、ローマ時代を彷彿とさせる浮き彫りが施された大きな壺が柱の近くに置かれていた。ゆったりとソファに座り、談笑している紳士淑女達の様子は、映画のワンシーンのようだった。

そして——ロビーには、背が高く、端正な顔立ちで（性格はひねくれてるけど）仕立ての良いスーツを着た王子様。ロビーにいる女性達が、彼にちらちらと視線を投げてるのに、彼は気付いて

ないみたい……

「っ!」

一瞬ぐらつとしたものの、なんとか踏み止まった。気を抜いちゃだめ! ふたたび歩き出した私の耳に、鹿波さんの興奮した声が蘇る。

『とつても素敵よ、寿さん! だから、堂々としてらっしゃい。あなたを見た時の、副社長の顔が見てみたいわ!』

——終業後、レンタル衣装屋さんで鹿波さんセレクトのワンピースを着込み、待ち合わせ場所の高級ホテルのロビーに来ただけ……

（鹿波さん、やっぱり……）

ものすごーく、場違いじゃないですか、私っ!? 雰囲気馴染めない……あ、また絨毯につつかかったっ!

ゆっくりと、転ばないように歩み寄る私を、副社長は黙ったまま、じっと見ていた。

「……寿?」

う……確認された……。そうよね、私じゃないみたいよね……

「は、はい……」

絨毯のループに細いヒールをひっかけそうでコワイ。足元から目を離せない……

「えっ!」

ぐいっと腕を引っ張られ、思わず顔を上げると……副社長の左手が、私の腰に回っていた。